

**主 題：重荷を負い合う神の家族④****聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 6章3－4節****テーマ：兄弟姉妹の罪に対してどのように私たちは応答すべきなのか？**

私たちはここ数週にわたって、重荷を負い合う神の家族について、また特に、兄弟姉妹の間で起きる罪にどのように応答するのかに関して時間をかけて学んできました。その続きをきょうも一緒に考えてみます。これまでに学んだことも思い返しながらから1節からよく見てください。

**ガラテヤ6：1－5**

「：1 兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。：2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。：3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。：4 おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。：5 人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。」

さて、改めて思い出してみてください。私たちは今、罪の問題、特に兄弟姉妹の抱える罪に対して聖書的に向き合う方法を考えていました。残念ながらキリストを信じ救われて新しく造り変えられたからといって、すべての争いや問題、困難が消えてなくなってしまうわけではありません。私たちはみなキリストの弟子として確かに愛を実践し合おうとします。しかし、それでも私たちは未だに罪深い性質を持っているからこそ、互いにあやまちを犯して傷つけ合い、時に関係に難しさを抱えることさえあるのです。罪というものは現実の問題として存在しています。神の家族—兄弟姉妹の間を引き裂くような出来事さえ日々あります。だからこそ、どのように私たちひとりひとりがその問題に対してきちんと対応すべきなのかを、みことばから知っていることが欠かせなかったのです。

**○兄弟姉妹の罪に対する正しい応答：10個の要素**

これまでに私たちは罪に対してとるべき正しい応答、10個ある要素のうち七つ目までを見てきました。それぞれを覚えているでしょうか？

**1. 同じ神の家族に属する者であると覚えること 1 a 節**

6：1はこう始まっています。「兄弟たちよ。」と。私たちが罪を犯した兄弟姉妹を目にする時、その人から距離をとって冷たくするものではありませんでした。私たちは同じ神様を愛している家族の一員なのだはず心に留めることが大切だったのです。

**2. あわれみをもって罪を取り扱うこと 1 b 節**

「もしだれかがあやまちに陥ったなら」と続いています。神の家族のだれかがあやまちに陥ったなら、すぐに非難するものではありませんでした。自分も罪の恐ろしさ、罪の誘惑の危険性を知っているからこそ、それを知っている者にふさわしい思いやりを示して、どんな罪であろうと、私たちは喜んでその罪に苦しんでいる者を助けてあげようとするのです。

**3. 御霊に満たされて兄弟に向き合うこと 1 c 節**

続きに「御霊の人であるあなたがたは」と書いています。あやまちに陥った者を助けるのは、なにも一部のの人にだけ与えられていた働き人ではありませんでした。御霊によって今を生き、御霊によって導かれているすべての信仰者に神様が与えた働きだったのです。

**4. 正しい状態への回復を追い求めること 1 d 節**

「柔和な心でその人を正してあげなさい。」と続きに書いています。神様の道から足を踏み外してしまっている者がいるなら、私たちはそのような者を放置したままにしておくのではありませんでした。その者がもとの状態へ、もとの道へと戻って来ることができるようにと、私たちは愛をもって正してあげようとするのです。

#### 5. 柔和な心をいつも働かせること 1 e 節

「柔和な心で」と書いていました。あやまちに陥って苦しんでいる兄弟姉妹を見たら、どんな態度であろうとただその人を正せば良いと教えられていたのではありませんでした。私たちは神様の柔和さを覚えて、そして必要な優しさと、時に厳しさをもって正してあげることが重要だったのです。

#### 6. 自分自身に最新の注意を払うこと 1 f 節

1 節の最後に「また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」と続いています。罪を犯した神の家族を目にして、柔和な心でその人を正してあげようとするその時、私たちは同時に、自分自身が罪を犯さないようにと気をつけている必要がありました。穴に落ちてしまった人を引き上げる者が同じように穴に落ちてしまっただけではいけないのです。私たちは自分の内にある梁をまず取り除いて、それからあやまちに陥って苦しんでいる兄弟姉妹のちりを取り除いてあげることが欠かせませんでした。

#### 7. 一人では抱え切れない重荷を負い合うこと 2 節

「互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」と書いています。信仰者はだれであれ、この地上での歩みにおいてさまざまな重荷を抱えています。特に私たちは日々経験する罪との戦いであつたり、葛藤に悩まされ、大きな悲しみや苦しみを覚えることもあるのです。しかし、そんなひとりでは抱えきれない、自分だけでは背負うことのできないその重荷を、私たちは神の家族とともに互いに負い合うことができるのだと教えられていました。信仰生活は決して孤独なものではなく、互いに正しい道へ戻れるようにと励まし合ったり、重荷を担い合うことのできる兄弟姉妹と一緒に歩いていくことができるのだというわけです。

七つの要素を見てきて、皆さんどうですか？私たちが罪に対して正しく応答することにおいて、どれも欠かせないものでした。でもこれですべてではありません。パウロはさらにことばを付け加えています。きょうは八つ目と九つ目の要素を考えてみましょう。そしてぜひ、その二つのことも続けて自分のこととしてよく考えてみてください。では早速、兄弟姉妹の罪に対する正しい応答、八つ目の要素から考えてみましょう。

#### 8. 慎み深い考えをもってへりくだること 3 節

八つ目の要素は、「慎み深い考えをもってへりくだることです。」改めてみことばを見てください。パウロは2-3 節にかけてこのようにことばを続けていました。「:2 互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。:3 だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。」さて、この部分を読んでどう感じます？もしかすると、この2 節のつながりに不思議な感じを受ける人がいるかもしれません。互いの重荷を負い合うということと、自分をりっぱに思って自分を欺いているということとの間に、何のつながりがあるのでしょうか？と思う人もいるかもしれません。でもこのふたつの箇所は、非常に密接に結びついたものでした。もっと言うと、パウロはここで、ほかの兄弟姉妹の重荷を負い合うにあたって、特に信仰者が陥りやすい危険、特に私たちが陥りやすいあやまち、罪というものを明らかにしていたのです。その危険とは何だと思います？それは、私たちの持っている高慢さ・プライドでした。もし、何者でもない私たちが、本来の自分の姿を忘れ、高ぶっているようなら、私たちはほかの人の痛みや困難を背負おうとは決してしないのです。よく考えてみてください。パウロは書いていました。3 節「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら」と。

▶「思うなら」

ここで出てきた「思うなら」ということばですが、これにはもともと「考える」とか「意見を持つ」また「推測する」といった意味が含まれています。また皆さんに覚えていてほしいのは、このことばは、ある人の抱く実際とはかけ離れた思い込みであったり、想像、実際の現実とは大きく異なっている考え、というものを表したりもしました。そういったものをこのことばは持っているのです。例えば、同じことばはルカ8：18にこんなふうにかかれてあります。「だから、聞き方に注意なさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取り上げられるからです。」ここで今見ました「持っていると思っている」これが同じことばになるのですが、皆さん、これはどういうことですか？この人は本当に持っているのですか？本当には持っていないのです。持っていると思っているだけです。同じような使い方としてIコリント8：2では、同じことばをパウロがこんなふうに使っていました。2節「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。」と。ここで出てきたこの「思ったら」と訳されているのが、同じことばになるのですが、このことばが何を言わんとしているのか、どうですか？見えてきますか？ある人が、「自分は何かを知っていると考えていたとしても、自分は知っていると思っ込んでいたとしても、現実はそのとは全く違って、まだ何も知っていませんよ。」というわけです。実際の現実とは大きく異なっている本人の思い込みであったり、考えを、この「思うなら」ということばは表していました。そして、そんなことばをパウロはこの箇所ですべて用いて、人々に対して強く警告していたのです。「皆さん、もしだれでも、りっぱでもない、本来何者でもないそんな自分を何かりっぱでもあるかのように思っ込んでいるのなら、それは自分を欺いているだけに過ぎません。現実をきちんと見ていません。ただうぬぼれているだけ、自分をだましてにしか過ぎません。」と。みことばが言っていることを考えれば、まさにその通りですよ。

立ち止まって考えてみてください。そもそも罪によって汚れていた私たちひとりひとり。そんな私たちが例えば救いにおいてできたことなど何か一つでもあったでしょうか？どんなあやまちであれ、すべてを正しくさばかれるその神様の完全な御姿のお方の前に、義と認められるために私たちができたことは何かあったでしょうか？文字どおり何一つありませんでした。私たちのどんな正しさであったとしても、人の目には良いと思われる行いであったとしても、聖なる神様の完璧な基準を満たすことができるような者など、だれひとりとしていませんでした。かたくなに神様に逆らい、生まれながらに御怒りを受けるべき子らとして生きていた私たちはみな、自分自身の力で神様を喜ばすことのできる何かを差し出すことは、絶対にできなかったのです。だからこそ、私たちには何の希望もありませんでした。私たちはみな自分の罪深さのゆえ、当然値する永遠のさばきへとただ突き進んでいく存在でしかなかったのです。私たちには何もできませんでした。しかしそんな私たちが今、神様の救いにあずかり、神様の前に義と認められました。それは自分のゆえではありません。ただキリストを信じるその信仰のゆえ、神様の恵みのゆえでしかありませんでした。ただ神様が成してくださったそのみわざを通して、私たちは永遠の希望を持つ者へと変えられたのです。私たちがよく知っている箇所の一つ、エペソ2：8-9にこう書いていました。「:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるものではありません。だれも誇ることをないためです。」

救いは最初から神様の恵みのみわざでした。では、その救いの始まりだけが神様の恵みの働きだったのでしょうか？そうではありません。救われた後、その始まった歩みも、その過程もすべて同じでした。日々の生活の中であって、私たちに必要な食べ物や、私たちに必要な衣服、仕事、住む場所を与えてくださるのも、神様でした。私たちの内に働いてくださり、霊的成長に必要な助けや力を与え続けてくださるのも、神様でした。みことばを通して知恵や励ましを与えてくださるのも、同じ神様ですし、信仰生活に欠かせない教会を、神の家族を与えてくださるのも、神様でした。私たちが何か勝ち取った

ものはありません。当然のように値したものもありません。私たちが受けたもの、また今も受けているもの、それはどんなものであったとしても神様からの恵みの賜物でしかないのです。

そしてこの事実を私たちが正しく覚える時、この事実は私たちを大いにへりくだらせません？私たちが自分には最初から何もないということを正しく認めて、すべてのものが神様からの恵みであるのだということに感謝し、いつも神様に拠り頼む存在であるのだと覚えるなら、この事実は、ほかの何かではなく、私たちを神様の恵みを誇りとする者へと駆り立てるのです。かつてパウロ自身も I コリント 15 : 10 でこう口にしていました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての人たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」始まりから途中、途中から終わりに至るまで、神の恵みのみわざでした。私たちが何かをなしたわけではないのです。でも、もしも仮に、そんな私たちがりっぱでもない、何者でもない自分を何かりっぱな者であるかのように思うなら、私たちが何かに値したかのように思うなら、私たちはプライドにあふれ、自分自身を欺いていることになるのです。

皆さん、高慢さ・プライドの抱えている大きな問題は何だと思えます？それは、高慢さというのは、自分自身を欺くということです。本来何者でもない自分を、何者かであるように思い込み、みことばを自分の思いや考えに取り変えてしまえば、当然その人は自分勝手に生きようになっていきます。プライドは、その人が最も見なければならぬ神様の姿を忘れさせるのです。申命記の中でもこんなふうに言われています。神様はイスラエルの民に対しこう述べていました。申命記 8 : 14 「あなたの心が高ぶり、あなたの神、主を忘れる、そういうことがないように。…」高慢になっているのであれば、私たちは自分を欺いています。高慢になっているのであれば、私たちは神様を忘れてしまっています。

そしてこのプライドの罪は、私たちにとって関係のない話ではありません。普段あまり気づいていないかもしれません。でも残念ながら自分自身を中心とするその思い、自分を何者かのように考えてしまうその高慢さやプライドというのは、もうすでにそれぞれの内に住み着いています。以前、一度紹介したこともあるスチュアート・スコットという牧師も、こんなことばを残していました。「プライドは蔓延している罪です。どこにでも存在し、様々な形で表れます。認めたくはないかもしれませんが、私たちは皆、誰もが高慢さを抱えています。問題は『私はそれを持っているか？』ではなく、『どこにそれがあるか？』そして『どれだけそれを持っているか？』なのです。」私たちはみな持っています。持っていないとするならば、プライドに欺かれているのです。

そして特に、この高慢さの罪が私たちの内によく表れる場面があります。どんな場面かわかります？それこそ、私たちがだれかの罪やあやまちと向き合う時、兄弟姉妹の重荷を負い合うその時だったりするのです。どんなふうに表れるのか？もちろんいろんなこと挙げられますが、例えば私たちはこんな場面にプライドや高慢さ持っていたりします。例を挙げると、その高慢さやプライドは、人の罪をただ非難するその態度に現れているかもしれません。どうしてか？自分がどんなあわれみを神様から受けたのかを忘れてしまっているからこそ、いっさいあわれみの心を持たずに、相手の問題を指差して責め立てたりするわけです。そこにはその兄弟姉妹の重荷と一緒に背負ってあげようとする思いはありません。苦しみを分かち合おうとするその姿勢もありません。ただ自分の思いや考えを示すことだけに心が捕らわれているのです。それだけではありません。その高慢さやプライドというのは、人の弱さに忍耐を示さないという態度に現れているかもしれません。どうしてか？自分がどんな忍耐を神様から受けたのかということを忘れてしまっているなら、自分の基準や考えに基づいてそれらに向き合おうとするからこそ、自分の基準から相手が外れていれば、怒りや不満をあらわにしようとするのです。そこにもその兄弟姉妹の重荷を背負って一緒に歩いていこうという思いはありません。相手の苦しみや困難というものを本当に理解してあげようという思いも姿勢もありません。ただ自分の都合の良い時に、自分の都合の良いやり方で行いたいという間違っただけの思いが心にあたりたりするのです。それだけではありません。

高慢さやプライドというのは、自分自身の罪をいつも小さく考え、相手の罪を大きく考えるという態度に現れているかもしれません。どうしてか？自分が神様の前にどんなに罪深い存在なのかということをおぼえてしまっているからこそ、自分の問題に目を向けることよりも、相手の罪を問題視し、そして相手のしたことを赦せないで心の中でさばいていたりするのです。そこには、その兄弟姉妹に対する重荷を柔和な心で扱おうとする思いはありません。苦しみに寄り添おうとする姿勢もありません。ただ自分の罪を棚に上げて、自分の正しさに心が捕らわれているのです。そんな人物のことをイエス様は何て言われていました？マタイ7：5でイエス様は、そんな人たちのことを、「偽善者よ。」と。自分が何かしら正しいと思っているなら、それは大きな間違いでした。イエス様は言っておられたのです。「偽善者よ。まず自分の目から梁を取り除けなさい。そうすればはつきり見えて、兄弟の目からもちりを取り除くことができます。」と。

またこの高慢さやプライドは、なにもだれかの重荷を背負おうとする者だけに表れるものでもありません。それは重荷を抱えている者の内にも表れます。どういうふうにか？ほかの兄弟姉妹の助けをいっさい求めないという態度に現れていたりするのです。なぜだかわかります？神様が救いとともにも重荷を負い合って生きていくようにと与えてくださった神様の家族の存在をおぼえているからこそ、ひとりでも信仰生活を歩めると考え、そして、兄弟姉妹と一緒に歩むことを表面上だけはしていたとしても、心では拒んでいたりするのです。でも、これも大きな間違いでした。「重荷はひとりでは背負えません。重荷はひとりでは抱えきれません。」と教えるその神様のことばよりも、自分自身のさまざまな思いや考えを優先しているに過ぎないからです。みことばもはつきりと言っています。このように箴言の中でも言われていました。箴言18：1「おのれを閉ざす者（直訳：自分を人から分離させる者）は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいを失う。」と。自分を閉ざす者は何を求めているか？自分の欲望を求めているに過ぎませんと。

もちろんほかにも挙げればキリがありません。しかしこうして私たちは、本来何者でもないはずの自分を何かりっぱでもあるかのように考えることがあります。高慢さにあふれて、私たちが見なければならぬはずの神様をおぼえて、自分自身の思いに捕らわれていることがあります。そしてそのようにプライドに支配されていけば、私たちはほかの兄弟姉妹の重荷を背負おうとすることに難しさを覚えるようになるのです。神様の求めておられる神の家族としての歩みを歩んでいくことを喜んでなしていくことを拒むようになるのです。なぜか？私たちの目が神様ではなく自分を見ているからです。だからこそ、私たちにどんな時もへりくだることが欠かせませんでした。現実とかけ離れた自分勝手な考えに立つのではなくて、自分は何者かであると思ひ込むのでもありません。私たちはみことばを通して、神様の前に正しく自分の姿を覚え続けなくてはならないのです。ジェームズ・ボイズという聖書註解者もこんなことばを残していました。「クリスチャンがほかの人の重荷を負うことを怠ったり、拒否したりするのは、自分がそれ以上の存在だと思っているからです。しかし、これは自己欺瞞に過ぎません。神の基準で測るなら、誰も何者にも値しないのです。」どうでしょう？果たして私たちは普段、みことばが教えている本来の自分自身の姿に心を留め続けているのでしょうか？神様の前に、自分がどんなにすばらしい恵みを受けたのか、また今も変わらずに受け続けているのかということをおぼえながら歩んでいるのでしょうか？それとも、まるで自分が何かに値するかのようには考え、自分自身を欺いてはいないでしょうか？高慢になって神様をおぼえ、自分勝手な思いになって、重荷を負い合うべき兄弟姉妹を、逆にさばくようなことをしてはいないでしょうか？おぼえてはいけません。ただ神様の恵みによって救われ、キリストにあつて今生かされている者です。すべてが当たり前ではありません。決して値しないものを深いあわれみによって受けました。だとすれば、私たちの内に誇ることできるようなものは、一つとしてありません。自分たちではありません。ただ誇ることできることで、それは私たちに救ってくださったキリスト・イエスの十字架、ただそれだけです。パウロも同じガラテヤでこう口にしていました。

6 : 14にこのように記されています。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」と。兄弟姉妹の罪と向き合うその時、私たちは思い上がって高慢になるのではなく、神様の目を正しく覚えることです。神様の恵みがなかったとすれば、自分は何者でもない。その恵みの態度でもって、私たちは苦しんでいる同じ神の家族の者に仕えていこうとするのです。慎み深い考えをもってへりくだること、それが罪に対する八つ目の正しい応答でした。

#### 9. 人と比べるのではなく、自分をよく調べること 4節

次に罪に対する正しい応答の九つ目の要素ですが、これは今私たちが見た八つ目の応答の内容と深く関わってきます。九つ目は「人と比べるのではなく、自分をよく調べること」です。私たちは兄弟姉妹の罪を取り扱う時、高慢にならないように、何となく注意を払うではありません。ほかのだれかの罪と比較して考えるのでもありません。自分自身の歩みを慎重に吟味することが欠かせないというわけです。もう一度みことばを見ると4節はこんなふうに始まっていました。「**おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。**」と。パウロはここで非常に簡潔な命令を口にしていました。皆さんに注目してほしい点が二つあります。

##### ▶「おのおの」「自分の行い」

一つ目に、パウロはここで「**おのおの自分の行い**」と述べていました。「**おのおの自分の行い**」と。つまりここでの焦点は、自分自身だということです。与えられている命令は、私たちがおのおの、各自、なすべき責任だったわけです。ほかの人がなしていれば自分は何もしなくてもいいです、ではありませんでした。また別のだれかの行いに真っ先に目を向けるのでもありませんでした。これは信仰者ひとりひとりに求められていた大切な務めであり、私たちは自分自身が自分の行いを、言い換えれば、自分の生き方を、自分の歩みをよく調べてみなければならない、というわけです。

##### ▶「よく調べてみなさい」

加えて二つ目に「よく調べてみなさい」と言われていました。この「よく調べてみなさい」ということばには、もともと「何かの本物かどうか、何かの信頼できるかどうか、それを判断するのに試験にかけること」を意味していました。何かの本物であるかどうか、何かの信頼できるかどうか検査する、吟味するといった意味をこのことばは含んでいました。何かの本物であるか、何かの信頼できるかどうかをチェックしようとするのであれば、私たちのその姿勢はどんな姿勢です？なんとなくすればいい、そんな姿勢ではありません。私たちは一生懸命になってそのことをなそうとするのです。それがこのことばの持っている意味でした。そしてこのことばは、例えば別の聖書箇所でも用いられていて、Ⅱコリント13 : 5にもこんなふうに書いていました。「**あなたがたは、信仰に立っているかどうか、自分自身をためし、また吟味しなさい。**」と。ここで「吟味しなさい」ということばが出てきていますが、これが「よく調べてみなさい」ということばと同じになるのです。またおもしろいのは、テモテでもこのように使われていました。Ⅰテモテ3 : 10「**まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事の職につかせなさい。**」と。ここで出てきていた「**審査を受けさせなさい**」というのが、この「よく調べてみなさい」と同じことばになるのです。そして、ここで気づいた人はいます？この「調べる」とか、「審査する」ということを行うためには、あるものが絶対に欠かせませんでした。何か？それは、審査するのに使う確固たる基準というものでした。これは当たり前のように聞こえるかもしれませんが、どんな審査であれ、自分勝手な別々の基準でなされていたら、何の意味もありませんよね。これがいいのではないか？あれがいいのではないか？という自分が考える基準に基づいて、それが本物かどうか、それが信頼できるかどうかを考えていけば、結果は、信頼できるかどうか分かりません。私たちが信仰を吟味するのにも、たとえば執事を選ぶのにも、私たちそれぞれが持っている独自の判断によってそれを決めていくものではありませんよね。そんなことをしたらその審査の結果というのは、人によってバラバラのあてにな

らないものになってしまうのです。自分の信仰や行いを調べるのには、それを測るための確固たる基準というものが欠かせませんでした。そしてその基準こそ、揺るがない神様のことばになるのです。私たちは自分勝手な基準で、自分自身の行いというものを探るのではありません。私たちは、自分はこう思うという、そのことに立って自分の心を吟味するのではありません。自分自身の生き方というものをみことばの基準に照らし合わせながら、よく吟味する必要があります。自分が神様の求めておられる歩みを本当になしているのかを知ろうと思えば、どこを見ます？私たちはみことばを通してしか知れないのです。だから私たちはそのみことばを知り、そしてそのみことばに照らし合わせながら、自分の歩みが本当にみことばに沿っているのかを詳しく調べようとするのです。それが皆さん、吟味するということです。この点に関してひとりの註解者もこんなふうに述べていました。「真の自己吟味は、単に定期的に自分の霊的状态を確認することではなく、むしろ自分の思考、態度、行動を聖書に啓示された神のみこころとキリストの心に従わせることなのです。」言わんとしていることがわかりますか？私たちは「自己吟味」とよく言います。でも、私たちの行い、私たちの考え、私たちの態度を、自分が思っているものと照らし合わせて考えるのではありません。私たちが自己吟味をなしていくのであれば、聖書にはっきりと示されている神のみこころを、神が何を言っておられるのか、と照らし合わせて、私たちは心を吟味するわけです。基準が大切でした。そしてもし私たちが、自分の行いであったり、自分の生き方というものを神様のことばによっていつも正しく吟味しているとすれば、私たちは、だれかに誇ることもできるような何かを自分の内に見ると思えます？自分勝手な基準ではありません。キリストが示された、キリストが残された、その基準に基づいて私たちがいつも自分自身の歩みを振り返り続けているなら、私たちは、受けた神様の恵みに感謝することはあったとしても、足りていない自分自身の愚かさを見せられてそれを悔い改めることはあったとしても、私たちに、何かを成し遂げたかのような高慢な思いになっておごるなどという態度は、絶対にありえないのです。私たちにもし誇ることもできるものがあるとしたら、先にも見た、私たちが救ってくださったイエス・キリストの十字架だけでした。

でも、実際の生活はどうでしょう？私たちは日々、この点においてさまざまな葛藤や戦い覚えることがあります。自分の行いというものをみことばで調べようとするのではなく、自分勝手な考えや思いによって吟味した気になっていたりもします。またほかの兄弟姉妹の行いと比較し始めてしまえば、次第に心の中でうぬぼれやプライドが芽生えていることさえあります。私たちがみことばを見るのではなくて、自分の考えやほかの人という基準を用い始めて周りを見渡し、あの人の罪より自分の方がいくらかマシですね、自分ならこんなあやまち絶対に犯しませんと考えて、本来の自分の姿を忘れてしまえば、兄弟姉妹との間に当然不一致や争いというものが生まれてきます。高慢になっているそこには当然、争いが現れてきます。思い出してみれば、まさにコリントの信仰者たちがそうでした。Iコリント4：6-7にこう記されています。「:6 さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言うて来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。:7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」

改めて考えてみてください。果たして私たちは、自分の歩みとキリストを比べることと、自分の歩みとほかの人の歩みを比べることと、どちらにいつも心を留め続けているのでしょうか？もし私たちがほかの人と比べていることに重きを置き続けているのだとすると、皆さん、私たちはプライドにあふれています。私の内から高慢があふれてきます。でも、もし私たちが人と比較するのではなく、自分の歩みを神様の基準に当てはめてよく調べているのであれば、みことばがはっきりと示しているその基準に自らを当てはめて自分自身を見ているのであれば、日々私たちは自分の姿を正しく見るようになります。自分の本来の姿を正しく見るようになります。そうすれば、どうなると思えます？続きにもこう書いていま

した。ガラテヤ6：4の後半「おのおの自分の行いをよく調べてみなさい」その後「そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。」と。私たちが正しい目線で見ているなら、私たちはほかの人に対して誇れることは何ともありません。何者でもない私たちが、だれかに誇ることができるとしたら、それはやはり、キリストの十字架でしかありませんでした。忘れてはいけません。私たちが誇ることができるものは、私たちの内には何もないということです。私たちがキリストを離れば、私たちに誇れるものなど何ともありません。あやまちに陥り、重荷を背負っている兄弟姉妹を見たときに、私たちは勝手に自分と比べて、その人を下に見る権威などだれも持っていません。ほかのだれかと比べるのではなく、まず自分の行いを、自分の歩みを、自分の生き方を、神様のみことばに照らして、みことばを通してよく自分のこととして吟味してみることです。そしてそれによって生み出されてくるへりくだった態度をもって、私たちは互いの苦しみや困難を分かち合い、一緒に歩んでいこうと。恵みを受けたその恵みの態度をもって、私たちは神の家族で重荷を負い合っ一緒に歩んでいこうとするわけです。人と比べるのではなく、自分をよく調べること、それが兄弟姉妹の罪に対して私たちがとるべき九つ目の応答でした。

さて皆さん、九つ目まで終わりました。あともう一つです。来週そのラスト一つを見ます。ここまで考えてきて、みことばは確かに私たちにとって必要なことを十分なほど与えてくださっています。私たちが神の家族としてともに生きていくために必要なその知恵を、助けを、私たちはみことばを通して知ることができます。だとすると皆さん、一緒にこのみことばに立って歩んでいきましょう。このみことばを互いに実践して、そして、その互いに実践するみことばを通して、何よりこんな私たちを救ってくださったその神様を愛する群れとして、ともに成長していきましょう。